２．相良三十三観音巡りにみる歴史的風致

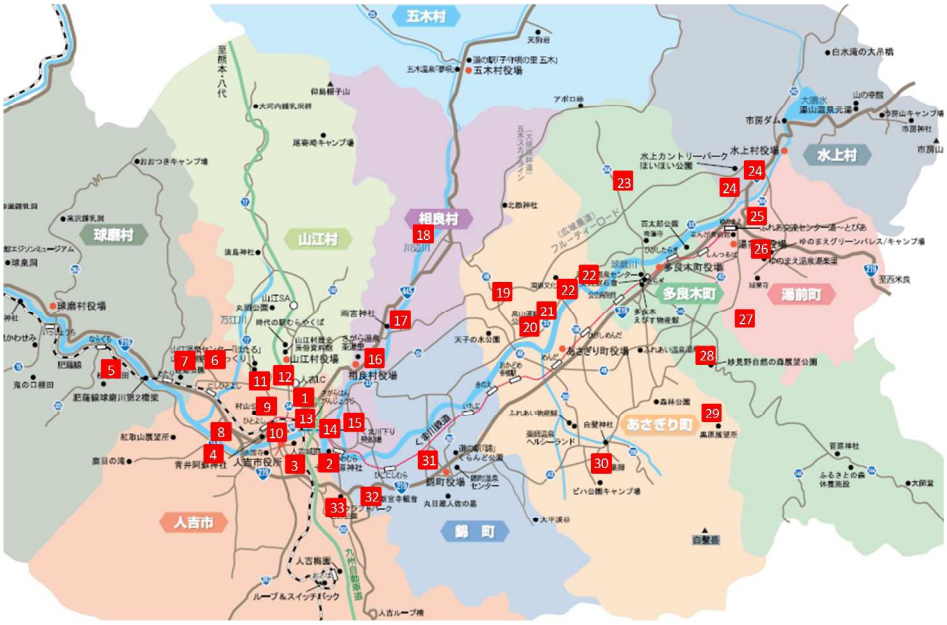
・はじめに

相良三十三観音巡りは、江戸時代に人吉藩で始まった巡礼で、選定された 33 箇所を巡り終えると人吉球磨地域を１周するようになっている。

相良氏統治下の球磨地域では、相良氏の菩提寺であり、現在の人吉市に所在する願成寺（がんじょうじ）を中心に広まった阿弥陀信仰や弘法大師信仰、庚申信仰や地蔵信仰など多くの信仰があったが、特に相良三十三観音巡りは、時代による変化がありながらも毎年彼岸の時季に行われ、今日まで受け継がれている地域にとって代表的な信仰の一形態である。

（１）札所巡りのおこり

相良三十三観音霊場は、『西国三十三ヶ所巡礼』を手本として、球磨地域にある 100 ヶ所をこえる観音堂の中から、人吉藩家老の井口武親（いぐちたけちか）が選んだ 33 ヶ所の観音霊場のことで、18 世紀の終わり頃、観音菩薩の三十三身にちなんで選定された。その際、御詠歌として各観音を詠み込んだことから、巡礼の地とされるようになった。後に観音巡礼の風習も広がりを見せ、現在まで人びとの精神的なよりどころとして信仰を集めている。



人吉球磨の相良三十三観音めぐり位置図

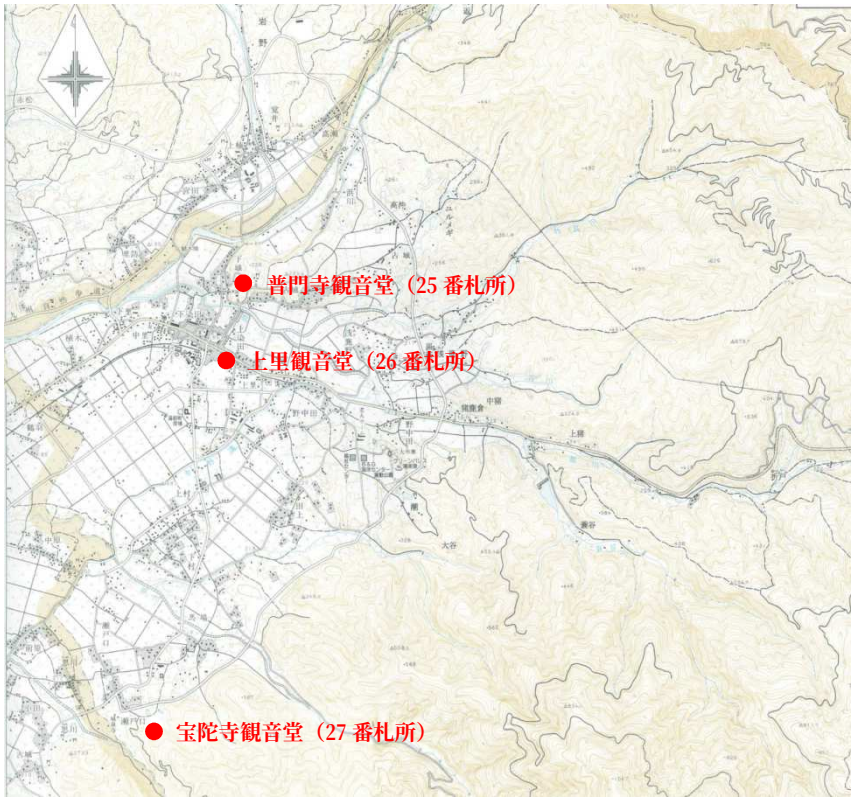
各観音霊場の観音像は、近年の調査や保存修理により造立時期も平安前期から、盗難により平成に入ってから再造されたものまで多岐にわたることが分かっており、札所については第 22 番と第 24 番の観音堂がそれぞれ 2 箇所となっているため、正確には 35 ヶ所の札所が存在する。

観音像のほとんどは通常では見ることができず、春と秋の彼岸に行われる一斉開帳など特別な日に限り全てを拝観できる。なお、巡る際は順番通り廻っても、順不同でも構わないとされている。

一斉開帳は、秋季の１週間、近年では春季も１日だけ開帳を行っており、この際に観音堂周辺の地域住民によって行われる「お接待」が大変喜ばれ、巡礼者だけでなく観光客も訪れる憩いの場ともなっている。

（２）湯前町の札所

人吉球磨地域で一体となって行われている相良三十三観音巡りの中で、本町内では、第 25 番、第 26 番、第 27 番札所の 3 箇所が選定されている。



湯前町内の相良三十三観音札所位置図

①　普門寺観音堂

普門寺観音堂（25 番札所）

普門寺観音堂は、第 25 番札所となっており、当初は湯山（現水上村）に所在し、市房大権現の別当寺として修験道が行われていたが、永正 3 年（1506）東光寺元住職の永尊により岩野里坊に移され、「施無畏（せむい）山普門寺」と号したことに始まる。

その後、天正 10 年（1582）に五世盛誉法印が無実の罪で殺害された「猫寺騒動」により堂宇は焼失するが、慶長 9 年（1604）に湯前城跡に再興されており、江戸時代には相良氏の信仰が厚く、寺院石高は郡内最高の 460 石を数えたが、明治時代には廃寺となり、寺は生善院（水上村）に習合された。

明治 16 年（1885）火災により神殿、拝殿、社務所等主要な建物が焼失し、現在は大正 15 年（1926）に改築された観音堂だけが残る。現在の観音堂は木造で 3 間×2 間の入母屋造、粘土瓦葺きとなっている。

普門寺観音の特徴は、第 32 番新宮寺観音堂（錦町）と同じく六観音を祀っている点にあり、承応元年（1652）に造立され、京都から下向したと考えられている六観音像は、聖、准胝（じゅんてい）、千手、馬頭、如意輪の五観音（十一面観音紛失）が残っており、准胝観音が残っている事から真言系であることがわかる。

なお、現在の普門寺観音堂の観音像は明治 36 年（1903）に彩色されている。

普門寺観音堂でのお接待光景

普門寺観音堂の観音像

②　上里観音堂

上里観音堂（26 番札所）

第 26 番札所である上里観音堂は、上里地区に所在しており、「町観音」とも呼ばれている。

観音堂の由来については不明な点が多いが、本尊である聖観音立像が室町時代後期の作であり、この像が嘉永 5 年（1852）に久米（現在の多良木町）の仏師弓削田市内により補修が行われていることが判っている。

この堂宇は、江戸時代に球磨郡に属していた米良山（宮崎県西米良村）との関係性が指摘されており、堂宇正面に掛けられている鰐口には「奉寄進　安鎮八幡宮　施主米良主膳則信」の刻銘があるが、安鎮八幡は村所八幡を指していることから、西南戦争などで移ってきたものと考えられている。

現存している堂宇は木造で、3 間×2 間の入母屋造、元は茅葺であったといわれており、明治 33 年（1900）に改築されたものであるが、この工事の際の棟札に記された大工の中に、米良山の出身者が含まれていることがわかっている。

上里観音堂（26 番札所）

敷地内の墓碑等

③　宝陀寺観音堂

宝陀寺観音堂（27 番札所）

宝陀寺観音は山号を「萬歳山（ばんざいさん）」とも、また、「集光山（しゅうこうさん）」とも伝えられる第 27 番札所で、辻区に所在する。

周辺には、明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂といった鎌倉から室町期の堂宇があり、宝陀寺観音堂についても、堂内の十一面観音立像が鎌倉～南北朝期の作であることから、草創は同時期であるといわれている。建立者は正確な記録がないため不明であるが、在地の豪族であった久米氏によるともいわれている。

堂の内陣は元禄 9 年（1696）に造られたもので、その他円柱（まるばしら）や須弥壇（しゅみだん）は、当時の姿を残している。元禄 11 年（1698）の寺院帳には当時宝陀寺が臨済宗であったことを示す記述があるほか、現存する墓碑等から、江戸時代に再興されたことが判っている。

その後、慶応 4 年（1868）に廃寺となり、外観は昭和 49 年（1974）に木造の 3 間×2 間で切妻造、セメント瓦葺（元茅葺）の姿に改築され、隣接する接待小屋とともに現在まで残っている。

宝陀寺観音堂（27 番札所）と参道

堂内の木造十一面観音菩薩立像

（３）相良三十三観音巡りに関する人々の活動

球磨地域では古くから阿弥陀信仰や弘法大師信仰、市房山信仰や庚申信仰といった多くの信仰が行われており、その中でも観音信仰から興った相良三十三観音巡りは、現在まで脈々と受け継がれている信仰行事である。

相良三十三観音巡りの中で行われる重要な活動は、観音巡りそのものと参拝者（観光客も含む）が行う「御詠歌」、各札所を管理する地域住民等が行う「お接待」であり、昭和 52 年（1977）刊行の『相良三十三観音めぐり』によれば、「御詠歌」については、札所を選定した人吉藩の井口武親と曾孫の美辰（びしん）により 18 世紀の終わり頃には始められ、「お接待」は証言の範囲ではあるものの、明治時代には既に行われていたといわれている。

①　御　詠　歌（ごえいか）

御詠歌は、仏教の教えを五・七・五・七・七の 31 音に詠み込んだもので、曲に乗せて唱え、相良三十三観音巡りにあっては、歌中に各札所（観音）の名前を詠み込むことを原則としているが、詠み込む場所については問わないものとされている。

相良三十三観音巡りで唱えられている御詠歌は、人吉藩家臣であった井口武親が札所を選定した後、武親が隠居中に中山観音堂(第 28 番札所、多良木町)で詠じたのが最初といわれている。札所と観音菩薩にまつわる 33 の願が詠み込まれており、現在でも春と秋の一斉開帳の折に、参拝者を中心に詠じる光景を見ることができる。

本町内の各札所についての御詠歌は、次のように詠まれている。

・第 25 番札所　普門寺

たれのため　普き門を出し身の　まどかに通う道に入るべく
吹く風にもれて　つとふや　むれの鐘　しばしはのりの　心すまさん

・第 26 番札所　上里の町観音
ねがいつつ西のむかへを　まちおらん　心にそむるむらさきの雲
みな人の心の闇をてらさんと　まち出る月の影のさやけさ

・第 27 番札所　宝陀寺
代々のくめども尽きぬ法の水　ふかきをしえのかぎり知られず
のりの水くめどもつきぬ山の井の　ふかき誓はそこきよきして

宝陀寺観音堂での参詣の様子

※　宝陀寺は草創当時(鎌倉時代頃)、現在の多良木町から湯前町にかけての一帯を支配した在地豪族の久米氏による建立といわれていることから、中に「くめ（久米)」が詠み込まれている。

② お 接 待

春と秋のお彼岸に行われる一斉開帳の際には、観音堂を守る堂守や地域に暮らす女性たちが中心となって「お接待」と呼ばれるもてなしを行い、普段ひっそりとしている各所の観音堂の周辺がひときわ賑わいをみせる。

お接待の内容は、お茶や漬物、札所によっては、ぼたもち（おはぎ）や煮しめ等を用意する札所もあり、参拝はもちろん、お接待を楽しみに訪れる人も年々増加している。こうしたお接待の中で、本町内では、第 27 番札所の宝陀寺観音堂において、他の観音堂と異なり「ささげ豆」を明治の頃から提供している。

ささげ豆は、主に秋の一斉開帳に向けて栽培がなされる。稲作の作業が落ち着く夏頃に種を蒔き、8 月下旬～9 月上旬迄に収穫。その後 2～3 日程度乾燥させたものを瓶などに入れて保存し、この豆は、翌年の栽培用の種子ともなって、ささげ豆の栽培もお接待とともに綿々と受け継がれている。

このように栽培・収穫されたささげ豆を、砂糖などで甘く煮たものが提供される一斉開帳では、お接待を行う期間毎に担当する隣保班が変わるため、ささげ豆や漬物の味付けも変わり、こうした味の違いを楽しむために札所を訪れる人も多い。

なぜささげ豆が提供されるようになったのか正確な理由は不明だが、本町は球磨地域の中でも稲作が盛んな場所であり、その作業の合間に作ることができ、かつ調理もすぐにできることからともいわれている。

また、主に関東方面で赤飯を作るときに小豆の代わりにささげ豆を用いる風習があるように、小豆では煮炊きの途中で割れることが、三十三観音巡りの不成就を予期させることから、これを忌避するために用いたともいわれている。

お接待の光景（普門寺観音堂）

宝陀寺観音堂で出されるささげ豆

相良三十三観音巡りは、春と秋の一斉開帳が地域の一大行事となっているが、この一斉開帳に向けて、豆の栽培を行い、観音堂と周辺の清掃や建物の風通しといった恒常的な維持管理は、地域住民が主体となって毎月行われており、一斉開帳時以外の巡礼者等にも、年間を通じて温かく迎え入れる人々の心が感じられる。

また、町内の各地区で行われている「鐘の織り」※では、現在も観音堂などへの旗や鐘紐の奉納が毎年行われており、観音堂の位置する集落だけでなく、地域全体で相良三十三観音巡りを支え受け継いでいる。

※「鐘の織り」は「鐘の緒織」の名称で全国的にも行われているもので、麻などで神社や寺の入口に吊して打ち鳴らす鰐口の紐や旗を作り、これらを奉納する行事のことを指す。当町でも毎年 9 月頃には女性だけが集まって宴を催すが、晒の布や御神酒を納める点など、信仰の要素も現在まで残されている。現在は町内の全 26 公民分館中 15 箇所で行われている。

旗・鐘紐の奉納に訪れた近隣集落の女性

奉納された旗や鐘紐

また、このお接待の風習は観音堂だけのものではない。観音巡りの一斉開帳がお彼岸に開催されていることもあり、町内の各所で同様の「お茶立て」と呼ばれる活動が行われ、賑わいを見せる。

市房山神宮里宮神社の歴史的風致でも記載した建造物のうち、相良三十三観音巡りの札所周辺にある社寺では、彼岸に合わせた行事として、ご開帳やお接待を行っている箇所がある。

宝陀寺観音堂近くの明導寺阿弥陀堂及び八勝寺阿弥陀堂、上里観音堂と普門寺観音堂近くの御大師堂ではそれぞれ開帳を行い、各観音堂と同じく「お接待」で参拝者等を温かくもてなしている。

明導寺阿弥陀堂の秋季法要

八勝寺阿弥陀堂の開帳の様子

お接待の光景（八勝寺阿弥陀堂）

お接待の光景（八勝寺阿弥陀堂）

また、明導寺本堂でも先述の明導寺阿弥陀堂同様、彼岸の法要を行い、多くの檀家が集まっており、こうした社寺堂宇周辺の賑わいは、本町に春と秋それぞれの季節の到来を告げる光景として永く受け継がれている。

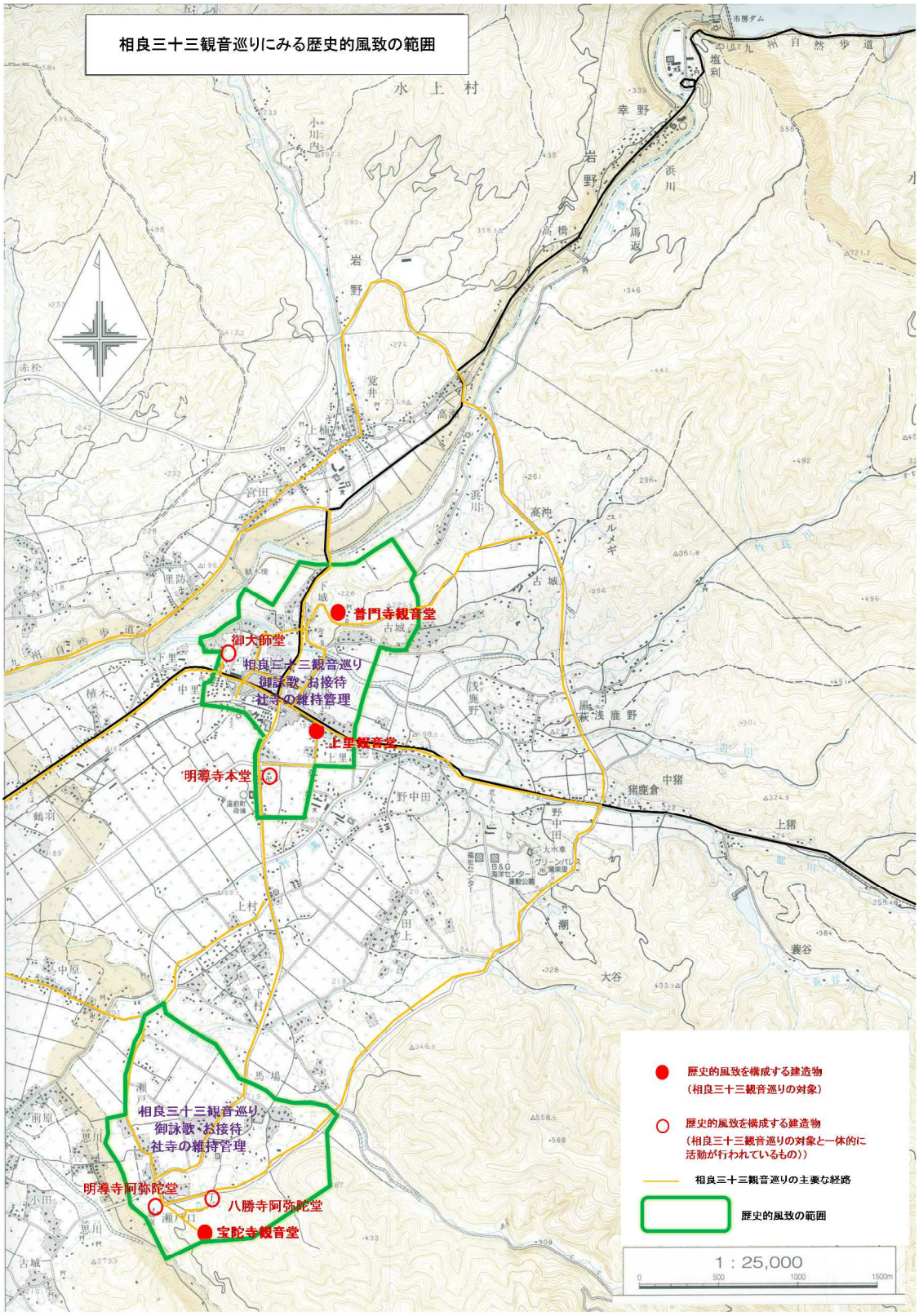
・ おわりに

相良三十三観音巡りが行われるようになった近世から近代、そして現代へと時代が変わるにつれ、巡礼者の移動手段もそれまでの徒歩での巡礼から自動車や大型観光バス、鉄道を使用したものへと変化をしている。

これまで人吉球磨地域全体で、延べ 5 万人を超える巡礼が行われている。特に近年は、平成 27 年（2015）に認定された「日本遺産」構成文化財となったこともあり、観光面で活用する動きも見られるようになった。

開帳の際、地域住民たちは自らも参拝を行い、「お接待」で参拝者を迎え、参拝者は白衣姿で「御詠歌」を唱え、地域の住民は、これら札所の管理に長年携わることで「相良三十三観音巡り」の風習を守ってきており、相互に他の札所を訪れることで、札所は地域間の交流を深める場ともなっている。

こうした光景は、相良三十三観音巡りの札所だけではなく、明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂といった周辺の社寺とともに、球磨地域に本格的な季節（春と秋）の訪れを告げるものとして、その歴史と伝統を今に伝える歴史的風致となっている。


相良三十三観音巡りにみる歴史的風致の範囲
普門寺観音堂
御大師堂
相良三十三観音巡り
御詠歌・お接待
社寺の維持管理
上里観音堂
明導寺本堂
相良三十三観音巡り
御詠歌・お接待
社寺の維持管理
明導寺阿弥陀堂
八勝寺阿弥陀堂
宝陀寺観音堂
歴史的風致を構成する建造物
（相良三十三観音巡りの対象）
歴史的風致を構成する建造物
（相良三十三観音巡りの対象と一体的に活動が行われているもの））
相良三十三観音巡りの主要な経路
歴史的風致の範囲
1：25,000
0
500
1000
1500m